

## たごうら児童クラブ 児童支援プログラム

スローガン

☆じぶんのきもちをことばでつたえる。

☆あいてのきもちをことばできく。

☆ぼうりよくでは、つたえない。

「ぼうりよく」とは、ひとの心とからだをきずつけることです。

(れい)

なぐる ける ぶつ

わるぐちをいう どなりつける おどす だます

いじめる はなしをしない むしする むすむ など

.....

～指導員の子ども支援～

(指導員の目標)

子どもたちが、互いに安心してのびやかに過ごせる空間（居場所）を確保できるよう努める。

(指導員の立場)

子ども達の間接を、大人の目でジャッジ（判定）せず、見守り支援する。  
子ども達には本来、自分たちで解決していく力が十分備わっていることを信じる。

(子ども支援のところがまえ)

スローガンに基づいて、子どもにわかりやすい支援を行う。あくまでも支援であって、子ども達の「気づき」を引き出していけるよう努める。

## (1) 常に気持ちを聴く態度でいること

- ・「あなたの気持ちを聴くよ」という姿勢を常に子どもに示し続けること。
- ・子どもが、何か伝えたいことがある様子なのに話してこないような時は、時間をかけ、忍耐を持って、話をできる環境作りに努める。支援者自身のことばがけやアプローチを変えてみる、距離をとる、時間を置く、場所を変えて二人きりになるなど、いろいろとくふうをする。
- ・気持ちを話しだしたら「あなたの思いを大切に聴いているよ」というメッセージが伝わるような聴き方に徹し、また、けっして途中で支援者のコメントや意見をはさまず、話し終わって本人が満足するまで聴き続ける。

例)

相づちをうつ

「そうだったんだね～」と肯定し共感する

「知らなかったわ、そういうことだったのね」と、意外だった気持ちを伝える  
子どもと同じ言葉をくり返す

「かなしかったんだね」「だいきらいなのね」「つらかったね～」など

- ・子どもの気持ちを、良い悪いで判定（裁定）しない。気持ちは一人一人全く違うことをわすれない。

## (2) 気持ちを聴き終わったら

- ・「話してくれて、うれしかった、ありがとう」という支援者の思いを伝え、「気持ちを伝えてよかった」と、子どもが必ず思えるような雰囲気では話を閉じる。けっして、伝えたことを後悔するような思いを子どもが経験することがないように、十分注意する。
- ・「もう、二度と話さない」「やっぱり大人のいうことはおんなじじゃん」「だから大人は嫌いなんだよ」などと子どもを怒らせたなら、支援者は子どもとの関係を再び回復しなくてはならない、次回はマイナスから始めるということを十分意識しなければならない。

### (3) 最後まで子どもが気持ちを伝えることにはならなかったとき

ア) 子ども達自身から、大人に伝えるまでもなく自分たちで解決できるという姿勢を感じた場合

「すごいね」「解決できたね」「あとはまかせるね、結果を教えてね」などと、ほめたり喜んだりして、支援者の応援している気持ちをことばで伝える。

イ) 子ども自身が、なかなか気持ちをことばに出来ず、反対のことを言ったり、ふざけて取り合わない時、また、イライラしたり怒ったり殴ってきたり逃げたりして、今後長く時間がかかりそうな場合

「いつか、話してくれたらうれしいなってずっと思っているからね」など、支援者が心を常に子ども自身に向けて開いていることを伝えるだけに留めておく。その後も、いつもあなたを気にしているよ、という気持ちの声かけを忘れない。

### (4) 子どもの行動に支援者のなげかけが必要と思われた場合

(スローガンに反する行動が見られた時)

#### <状況把握>

- ・ まずは静かに見守り、その場がどういう状況なのかを、把握する。
- ・ からだを直接傷つけるような暴力が出た場合は、直ちに引き離して「ストップ、今何が起きているのかな？」などと問いかけ、時間を止めて状況把握に努める。
- ・ 場合に応じて、暴力を出してしまった側に対し、年齢に応じたタイムアウトを実行する。(一人になって怒りを静める時間をとること)
- ・ 子ども達に、話をさせながら、こうなるまでに至った「振り返り」を共有する。この時、支援者は、途中で判定することをさけ、あくまでも子ども達の話最後まで聞くことに努める。
- ・ 子どものことばをオウム返しすることで、支援者に時間のゆとりができ、そのあいだにゆっくり考えながら状況を理解することもできる。

#### <支援>

- ・ 子どもが自分の頭で考えて行動が出来るよう、スローガンと照らし合わせながら、支援していく。
- ・ 子どもの素直な気持ちを判定(裁定)してはいけないが、子どもの行動については、支援者は常に一貫した姿勢で臨み、物事の良し悪し、道理をわかりやすいことばでしっかりと伝えていく必要がある。
- ・ 大人であるという、強い立場を武器にせず、一人の人間として「私メッセージ」「私の気持ち」を、冷静に重みを持って丁寧に伝えること。

例)

「私は、意地悪はいけないと思っているよ」「私はそんなのイヤだなあ」

「こんなことしたら、友達はきっとイヤだと思っているんじゃない。どうかな？」

「ねえ、殴られて痛くない？私だったら、怒っちゃうけど…」

「こんなことされて、イヤだな。もう遊びたくないよ」

- ・ 状況把握を間違っ、子どもの心を傷つけたことが分かったら、その時点ですぐ子どもに対して素直に謝ること。時を逃すと、子どもは心を開かなくなるので気をつける。
- ・ 子どものテンポはとても速いので、それに合わせ興奮したり怒鳴ったりすることがないように注意。あえてゆっくり静かに話すことで、テンポを遅らせことばを選びながら、子ども達に考える時間と余裕を与えていくことが大事。
- ・ からだやことばを使った暴力が出た場合「どんな気持ちを言いたかったの？おしえてくれない？」などと促しながら、気持ちをことばで伝えることが出来るような支援をする。
- ・ 子どもが「うざい」「きもい」などと、分からないことばを使ったときは、「それって、きらいってこと？やめてってこと？」などと、わかることばを与えながら、子ども達の語彙を増やし、表現のツールを広げていけるよう、支援する。
- ・ 最終的に、暴力を使わなくても、ことばを使って気持ちを伝えることで、言いたいことが十分伝わったのだ、という結論を導き出せるように支援していく。

(支援者としてのところがまえ)

(1) 子どもにとって、分かりやすい人であること

あえて意識して喜怒哀楽をはっきりさせるくらいが好ましい。誰が見ても、何を考えているのか分かりやすい態度でいること。このことが、子どもをととても安心させる環境となる。

(2) 子どもの前で「ありのままの私」であること

誰でも失敗したり、間違えたりする。スキだらけの人間ならばそのままの姿でいること。大切なことは、過ちのあと、人としてどんな態度でいるか、どんな行動をとるのか、子どもの前で、私たち自身の人間性が問われることを自覚する。

(3) 仕事に入る前に、自分の心を整える

自分の心の中に、クラブ以外のものが入り込んでいるときは、自己コントロールをしてから臨む。もし、どうしても出来ない事情のときは、勇気を持って他の指導員と替わってもらうことが望ましい。

(4) 休憩をとる

実質上、休憩時間がないので、子どもの前で心の状態を常にプラスにしていけるよう上手に休憩時間をとる。時には他の指導員に自分の状況を伝え、ある程度の休憩時間を確保することも大切。

(5) 自分と合わない子ども、どうしても感情的になってしまい、なかなかよりよい関係を作り出せない子どもがいる時

はじめは、他の指導員にまかせて、けっして無理をしないこと。こういう場合、子どもに関係なく、自分自身の中に問題をはらんでいることが多い。「あの子をみていると腹が立つ、イライラする」こういった感情が吹き出て来る場合は、指導員が人間である限り必ずあることを知っておいたほうがよい。

それが、子ども時代の自分であったり、親や兄弟など、身近な人との関係性から吹き出して来るトラウマ的感情であったりする場合も、十分考えられる。

指導員として、日頃から、自分自身がどういう人間であるのか、どういう感情を持ちやすくどういう傾向にあるのか、弱いところは何かなど、客観的な自己分析ができるよう、そして、さらに進んで自己コントロールができるよう、常に学ぶ必要を自覚していく姿勢が大切。

(6) 子どもが甘えてきた時、あるいは身体でぶつかってきた時  
(受容・共感)

おんぶ、だっこ、あるいは、殴ったり蹴ったりして、子どもが自分の気持ちをぶつけてきたときは、指導員として、子どもに受け入れられていることをまず自負してよい。

そのうえで、出来るだけ、からだ全体で受けとめてあげることが好ましい。こういうときは、子どもが何か指導員に気持ちを伝えたい時であり、グッドチャンスである。スキンシップを十分にしながら、子どもが言いたいことを受容し、その気持ちを「ことば」に通訳してあげることも大事。いづれにしても子どもに共感していくことで、自分と子どもとの関係が前進する良い機会とみていく。

大きな子どもで受容するのに無理があるときは、正直に出来ないことを伝え、「こういうことなら出来るよ」などと、別の形に受容・共感の方法を変えていく工夫も大切。

(7) 子どもが、意外なこと・嘘ではないかと思えることを話してきた時  
(信頼関係を深める)

どんなことばであっても、そのままことば通りに受け取る姿勢が大切。意外なことであれば素直に驚いた気持ちを表現して構わない。しかし、「うそでしょ」「信じられない」という表現の中に、指導員の、子どもに対して最初から疑いの目を向けるような否定的な気持ちや態度が感じられると、子どもは心を閉ざしてしまうので、気をつける。

あくまでも、素朴に子どものことばを信じて受け取る姿勢が必要。百歩ゆずって子どもが嘘を言っていたとしても、あえて支援者がだまされることが、子どもの罪悪感や反省の心を呼び起こすきっかけとなれば、結果としてプラスの効果を生み出すことになる。

これらのことを通して、子どもとの信頼関係がますます深くなっていくことが、大いに期待できる。

(8) 子どもが、殴ってきたり、暴言を吐いたり、人として許せないと思われる態度に出ている時。

また、指導員として、これはこのままにしてはいけなと感じた時。

まず、子どものペースにはまらないこと。相手の目をしっかりと見て「あなたがそういう態度でいるなら、私もゆっくり考えることにします」など伝えて、声のトーンを落とし、こちらは動じてはいない、本気だぞ、という冷静で強い態度を見せつけ、気丈に振る舞うこと。けっして、あわてず、現時点で解決しようとは思わないこと。ただし、このままではいけないという問題提示だけは、子どもに明らかに示しておくことをわすれない。逃げたと思わせてはいけない。

その場を離れることができたなら、周りの指導員と相談する。いつからそういう行動をとるようになったか？原因として考えられること等、指導員同士の情報交

換とチームワークが大切となる。申し送り等で問題を共有する。対応した指導員の責任ではないかというように、一人の指導員が抱え込まない方がよい。

クラブのスタンスが「子どもの気持ちを聴く」という、カウンセリングマインドである故に、子どものストレス発散が指導員に向かうことは、十分考えられる。

また、同時にこれはクラブの問題ではなく、家庭に返すことであると認識する。子ども達は、親には言えず、指導員には暴言を吐く。暴力を振るう。こういう状態を親がしるべきであり、指導員がかかえる仕事の範疇ではない。丁寧に正確に直接、保護者に伝え、保護者と協力して、子育て支援をしていくことが、指導員の仕事である。

保護者に伝えるときに気をつけることは、指導員が被害者のような立場にならないこと。これは仕事である。また、「あなたの子育てが原因である」というように、保護者に責任転嫁にするような伝えかたも好ましくない。

「子どものときに問題行動が出ていることは、何かのサインであるので、早く気がついて本当によかった。いっしょにそのサインが意味するものを、これから考えていきましょう。あなたの子育てをできる限り応援します。」という、気持ちで臨むこと。

指導員の仕事は、矯正したり教育するわけではない。あくまでも側にいる大人として、子育てを支援するのみ。最終的には、子どもの問題は保護者に返すというスタンスでいること。

また子どもに対しても「これは大切なので親に伝えるよ。あなたにも親に伝えたい気持ちがあるのでしょうか。いっしょにいてもいいよ。」などと断りをいれ、告げ口ではないことを確認しておく。

#### (9) 学校・保護者間との連携について

子ども達の環境である「学校」・「家庭」・「地域」のうち、児童クラブは「地域」の一部である。これをふまえ、児童の健全育成のために、学校の諸先生方、保護者の方々との綿密な連携がよりよくなされていくよう努力する。